

2015 Fall Joint Conference of Geological Science of Korea参加報告

会長 井龍康文 (東北大学)

大韓地質学会の招きにより、昨年(2015年)の10月28日から31日に済州島で開催された2015 Fall Joint Conference of Geological Science of Koreaに参加した。(ただし、学会行事および発表は28日と29日に集中して開催)。日本地質学会と大韓地質学会は、2007年以来、互いに隔年で学術大会を表敬訪問しており(ただし、2011年の訪問はなし)、2015年度は、日本地質学会が訪問する側であった。会場は、Ramada Plaza Jeju Hotelという豪華リゾートホテルであった。

会議初日(28日)に、昼食をとりながら、大韓地質学会会長であるCHEONG Dae-Kyo教授と会談した。その際、大韓地質学会は2024年の万国地質学会(International Geological Congress)に立候補したいので、日本地質学会に協力をしたいとの要請があった。特に、巡検に関しては、10コースを提案して欲しいとのことであった。これに対して、日本地質学会は大韓地質学会と学術交流協定を締結しており、執行理事会に諮ったうえで、可能な限りの協力をすると回答した。なお、2024年の万国地質学会に対しては、ロシア、ドイツ、イングランド、デンマーク、カザフスタンが立候補の意思を表明しており、激戦とのことであった。その他には、これまでの交流実績と今後の交流に関して意見を交換し、両国の交流をさらに発展させることで合意をみた。特に、主に学生を対象とした巡検の相互受け入れや両学会の学術大会で開催される国際シンポジウムへの研究者の相互招聘を活発化することで意見の一致をみた。

29日の午後には、大韓地質学会の総会が行なわれた。私は、日本における地質学の諸分野の最新の研究成果と研究動向を紹介する講演をするように依頼されていたので、これを行った(The current research trends and activities of geology in Japan)。本講演に際しては、地質学会の各専門部会から、自らの学問分野における最新の研究成果をまとめたスライド(パワーポイント)の提供を受けた。ここに記して謝意を表する次第である。講演は好評で、懇親会の際に、数人の中堅研究者から質問を受けた。なお、総会では、大韓地質学会との学術交流協定締結のために本会議に参加していた日本地球化学会会長である川幡穂高氏も招待講演を行った。29日の夜には、懇親会に招待された。懇親会は、バイキング方式で行なわれたが、日本でおこなわれるような立食パーティーではなく、着席パーティーで行なわれ、豪華な料理が供された。日本地質学会第119年学術大会(2012年大阪大会)の懇親会に参加されたYU Kang-Min教授(当時の大韓地質学会会長)から、「韓国では立食形式の懇親会は考えられない」と聞き、習慣の差を感じたこ



とがあったが、なるほどと思った次第である。以上の公式行事以外の時間帯には、私の専門分野である、古気候・古海洋、第四紀地質分野の講演を聴き、ポスター発表を見るように心がけた。ほぼ全ての講演・ポスターで使用言語は韓国語であったが、図やグラフを通じて、内容の概要を把握することができ、科学は人類にとって、共通言語の一つであることを再認識した。韓国は海洋地質の調査・研究に力を入れており、朝鮮半島周辺海域の海洋地質に関する講演・発表が充実していた。また、地層処分に関連したセッションでは、本学会の吉田英一会員の話題(Geological characterization of the fault for defining exclusion feature in crystalline rocks around radioactive waste repositories)が注目された。また、日本地質学会リーフレット4「日本列島と地質環境の長期安定性」が、日本における地層処分に関する研究例として紹介された。

30日は、吉田英一会員とともに済州島の地質巡検に招待された。案内をして下さったのは、KIM Young-Seog教授とCHAE Byung-Gon博士であった。済州島は火山の島で、この島にある漢拏山(ハルラサン; 標高1,950 m)は韓国の最高峰である。2010年には、済州島全域が「済州島ジオパーク」として世界ジオパークネットワーク(GGN)に認定されている。巡検では、万丈窟(マンジャングル)、城山日出峰(ソンサンイルチュルボン)、サングムブリ等を訪れた。マンジャングルは世界最長の溶岩洞窟で、壁には溶岩が流下した際に形成された、平行な筋が無数に認められ、他の成因による洞穴とは異なった景観を呈していた。また、随所で、溶岩石筈などの溶岩洞窟に特有のさまざまな地形や生成物を見ることができた。昼食を挟んで、済州島の東南端にあるソンサンイルチュルボン(標高182 m)に登った。この山は、10万年ほど前に形成された火山で、頂上ではかつての噴火口跡(直径約600 m)を見ることができた。サングムブリは、韓国語で「凹んだところ」という意味で、漢拏山斜面に形成された、直径750 mほどの火口の跡である。訪れた当時は、一面がススキで覆われており、美しい景観を味わうことができた。

大韓地質学会と日本地質学会の交流は、確実に発展しつつある。政治のうへでは、問題の多い日韓関係であるが、われわれは地球科学者として相互の交流に努め、研究を進展させるように尽力すべきである。今回の韓国訪問が、そのための1ステップとなれば幸甚である。

写真2) ソンサンイルチュルボン頂上の展望台での記念撮影。左より、KIM Young-Seog教授、井龍、吉田英一会員。



写真1) 10月29日の午後に行われた大韓地質学会の総会で発表を行ったCHEONG Dae-Kyo大韓地質学会会長。